

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24651280

研究課題名(和文) 配偶者との死別後のグリーフケアを日中両国で共有するための基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Research for sharing new information between Japan and China about self-help activities among the bereaved people

研究代表者

日野 みどり (Hino, Midori)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00367632

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：死別の当事者自身によるグリーフケアの自助活動(ソーシャルサポート・ピアサポート)を日本と中国で共有するための第一歩として、両国における実態調査を行った。当該の活動を行う団体への訪問調査とともに、北京と上海でこうした活動に対する認知度および需要について質問紙調査を行った。中国では、若干の団体の存在にもかかわらず当該活動に対する認知度は低い。だが、活動の必要性については肯定的反応もあり、潜在的需要はあると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The long-range goal of this research project aims at sharing new information between Japan and China about self-help (peer support) activities among the bereaved people. As a first step to the goal, members of this research project conducted investigation and surveys for understand the actual situations. Aside from interviews with six relevant organizations in both countries, we also conducted a questionnaire survey in Beijing and Shanghai, China, to learn about elder people's awareness and needs for these self-help activities. Despite a few organizations which provide peer support services in China that we have identified through the research, our respondents had low awareness of their practices. However, we discovered that there are some positive reactions to the need, which indicates potential demand for the self-help practice of bereavement care.

研究分野：中国地域研究

キーワード：中国 グリーフケア 上海 北京 国際研究者交流

### 1. 研究開始当初の背景

日本におけるグリーフケアの理論と実践は欧米諸国から紹介された。その受容過程では、欧米起源の理論や活動を日本文化の文脈に沿うようカスタマイズする実践がなされてきた。自助グループ形式のグリーフケア活動は1990年代に始まり、本課題の連携研究者である河合らにより1990年に設立された「ほほえみネットワーク」を嚆矢とする〔河合1997〕。

翻って現代中国には、グリーフケアの概念・実践は普及していない。家族との死別の悲嘆は個人で処理すべき事項と考えられていること、私的事項に政府関係者・医療関係者・宗教関係者など「公的セクターの他者」の介入を好まないことが知られる。だが、死別の当事者自身による自助的活動（ソーシャルサポート・ピアサポート）には、それと別種の可能性があるのではないか。また、中国では近年、草の根NGOなどの組織が都市部を中心に勃興し、市民が自発的に各種活動を展開する空間が形成されつつある〔李2012〕こと、天災や事故などによる人命の喪失が経験され、死別の悲嘆に集団で向き合う状況が出現していることも、日本と共通する。

### 2. 研究の目的

上記の背景をふまえ、本研究課題の計画策定にあたっては、死別の当事者が主体となっていく自助グループ活動（ソーシャルサポート・ピアサポート）について日本の経験を中国の関係者と共有する可能性を探ることを長期的射程とした。その際、中国の研究者と協力して国際共同研究の体制を構築した。日中関係の悪化、日本人の対中感情の悪化が著しい現在、「死別の悲嘆に寄り添い、支える」という国家・民族・文化を超えた人間存在の根源に関わる要件について日中共同研究を行うことには、両国の国民レベルの共感と交流に資する点で大きな意義がある。

こうした射程を捉えるために、本研究課題が目的としたのは、その第一歩として日中双方におけるグリーフケア（ソーシャルサポート・ピアサポート）をめぐる現状を把握することである。第一段階は日本で展開されている関連の活動についての理解を深めることである。第二段階として、中国における同様の活動に関する情報を収集し、その実態を把握することに努めた。それと並行して、中国の高齢者がグリーフケア（ソーシャルサポート・ピアサポート）についてどのような認識をもっているかを把握することも重要である。

### 3. 研究の方法

上記の諸点を解明するため、以下の方法で研究を遂行した。

(1) 訪問調査。日本および中国で、関係団体・個人を訪問し、聞き取りおよび活動現場見学を中心とした調査を実施した。

(2) 調査紙方式の意識調査。中国・北京および上海の2都市において、高齢者を対象に、グリーフケア（ソーシャルサポート・ピアサポート）に対する認識や潜在的ニーズの有無を把握する調査紙調査を実施した。

(3) 文献調査。日本および中国で、学術論文・一般書籍・メディア報道などを対象として関連情報の収集を行った。

### 4. 研究成果

(1) 前項2で挙げた第一段階として、日本でグリーフケア（ソーシャルサポート・ピアサポート）の活動を展開する3団体を訪問し、調査した。団体A（東京）、団体B（大阪）、団体C（広島）（いずれも仮名）である。Aは研究者および死別の当事者が中心となって設立し、定例会の開催、サポート人材の養成講座、媒体（ニュースレター）発行などの事業を行う。Bは葬儀会社が顧客サービスの一環として行い、人員（社員およびアルバイト）と予算を投じて、電話による見守り活動、定例会の開催、媒体（ニュースレター）発行などの事業を行う。またCは死別の当事者が自ら設立し、死別と離婚のいずれかで単身となった人を対象とする。設立者に加えて数名の会員がさまざまな親睦活動や互助活動を提案し、定例会に加えて頻繁な活動が展開する。

3つの団体には共通点と相違点があるが、共通点として2点を挙げられる。まず、熱心な個人の力によるところが大きく（企業の行為であっても、熱心な社員が当該事業を企業の正規業務と位置付けるまで力を尽くした）、企業の業務ないしNPO法人の事業であるか任意団体の手弁当の行為であるかを問わず、中心的役割を担う人は多くの労力と時間を活動に投入していることである。なお、この労力と時間は、活動の維持継続を可能にする（中心人物が交代しても活動を存続しうる）ためにも用いられなければならない。以上が人的（ソフトウェア的）要因であるとするならば、第2点として物的（ハードウェア的）要因が重要であり、活動の拠点となる空間を何らかの形で確保する必要がある。調査を行った3団体では、公共施設、時間貸しの民営会議室、個人の住宅、団体の自前の拠点など、さまざまな形で活動拠点の調達が行われていた。

活動を維持存続させる上での課題があるとするならば、活動を属人化させすぎないこと、換言すれば中心人物に依存しすぎないような組織構造を築くことであろう。それには、団体の成員間に理念の共有がじゅうぶん行われ、活動を企画実施する成員と活動を楽しむ成員が二分化することなく組織を展開できることが望ましい。

(2) 前項の第二段階として、二つの調査を実施した。第一に、中国でグリーフケア（ソーシャルサポート・ピアサポート）を行う団体の実情について、海外共同研究者の力を借りて情報収集を行った。その結果、上海市および北京市で下記の団体の存在が判明し、それぞれについて以下の通り訪問調査を実施した。

上海市に子女と死別した親の自助活動団体 X（仮名）がある。この団体を組織し支援する霊園・葬儀会社の総経理を訪問し、インタビュー調査を実施した。また、団体の関係者（当事者 2 名、事務局員 1 名）に面会し、インタビュー調査を実施した。

X は政府登録 NGO であり、そうなれたことは当該企業の支援によるところが大きい。同企業は金銭面・物質面の支援に加え、社員の提供など人的支援も行っている。亡くなった子どもをしのぶ X 専用の展示スペースも提供している（写真 1）。



写真 1 X の専用展示スペース。霊園の建物内の一角に設けられている。(2012 年 12 月 22 日、日野みどり撮影)

子女との死別という個人的事情を現代中国の政治的社会的文脈の中に定置するとき、精神面の悲嘆という範疇をはるかに超える現実的かつ深刻な課題が浮上する。それは国家が推進した政策と国家に属する個人の間の矛盾に関わり、少なくとも日本ではみられない要素である。具体的には、計画出産政策に従った結果としての一粒種を失うと、喪失の苦痛に加えて老後の担い手の不在への不安に直結し、一部の人はその矛先を国家当局に対する補償の要求という形で表す。一粒種に先立たれることを指す「失独」という新語が生まれ、「失独」者つまり子どもを失った親が直面する「社会問題としての逆縁」をメディアが報じている。「失独」の親たちが抱える不全感はある種の被害感情となり、一部の親を、その原因を作った（と彼らが考える）政府に対する異議申し立て（陳情）の衝動へと導く。それは、国家の政策と個人の人生との間に生じる鋭い緊張関係だといえよう [日野 2015]

X の関係者へのインタビュー調査においてもこの点が語られた。X としては異議申し立てを行わない方針だが、X に属する個人が異

議申し立てに参加することは制限しないという。

このように、私的事情ともいえる近親者との死別が政治的・経済的な問題に直結する実態は、日本で通常考えられるようなグリーフケアの理念的枠組みを超えた高度に切実かつ敏感なものであり、研究代表者の事前の想定を超えるものでもあった。

北京市で高齢者支援・グリーフケアを行う団体 Y（仮名）を訪問し、創設者に面会してインタビュー調査を実施した。また、同じく北京市で高齢者支援活動を展開する団体 Z（仮名）を訪問し、創設者に面会してインタビュー調査を実施したほか、配偶者と死別した女性の定例親睦会の視察を行った。

Y・Z とともに、総合的な高齢者支援の一環として配偶者と死別した人向けのグリーフケア活動を行っており、この点は前述した上海の X と様相を異にする。また、Y・Z とともに創設者の物心両面における投入の大きさが際立つ。Z は創始者がボランティア活動の先駆者として名を成したこともあり、多くのスタッフを擁する団体に発展している。Y は企業の寄付活動とも連携し、高齢者支援活動を全国各地に広げている。

(3) 前項第二段階のもう一つの調査は、北京・上海市で実施したグリーフケア（ソーシャルサポート・ピアサポート）のニーズに関する意識調査である。海外共同研究者と連携して調査を実施し、得られたデータを整理・分析し、傾向を把握した。

前記 X, Y, Z のような若干の団体の存在にもかかわらず、この種の活動に対する認知度は低かった。特に北京ではその傾向が強かった。本課題を実施した我々もこれらの団体の存在をあらかじめ知りえていたわけではなく、従って、こうした結果は無理からぬこととも言える。しかし、死別の当事者の交流団体の存在について「聞いたことはある（が詳しいことは知らない）」と答えた人の割合が上海において北京より高いことは注目値する。上海の X は現地マスメディアへの露出にも積極的であり、このような当事者団体の

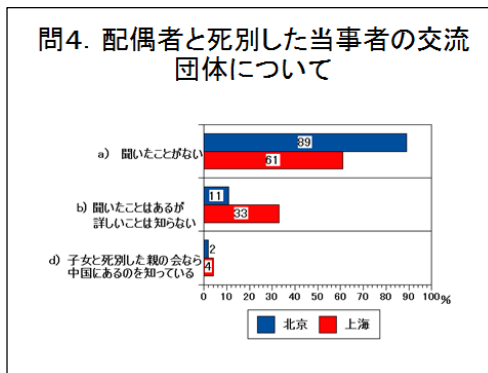


図 1 意識調査結果の一部（2015 年 3 月 7 日、最終報告会資料より。河合千恵子作成）

存在がマスメディアを通じて市民に知られていることが考えられる。

他方、こうした当事者による交流活動の必要性については肯定的な反応もみられ(北京46.8%、上海98.0%)、潜在的な需要はあると考えられる。

なお、本調査の実施にあたり、サンプルに関して若干の問題が生じた。サンプル獲得の困難さの結果、サンプルサイズが小さくなったこととサンプルの属性に偏りが生じたことである。前者のサンプルサイズについては、両市とも100を収集する計画であったが、集められたのは北京62、上海49であった。また後者については、特に上海においてサンプル収集が思わしく進まないため、調査従事者(大学生・大学院生)が長期休暇中に帰省先で調査を続行した結果、上海市外の農業従事者がサンプルに占める割合が増大した。このため、サンプルの属性の傾向が両都市で異なり、遺憾ながらデータを北京と上海で比較することが困難になった。

これらのいずれも、配偶者との死別という「不吉な」「話すことがはばかれる」話題を高齢者に質問すること自体が嫌われたのが原因とみられる。まして、初めて会う見知らぬ者(調査従事者)がそのような話題を持ち出すことには抵抗があった。この点は調査前から懸念していた事項ではあったが、調査を実施して改めて死別という話題を語ることへの忌避感が確認された。もっとも、海外共同研究者からは、調査対象との間にじゅうぶんな信頼関係を構築すればこの話題を語ることも不可能ではないという指摘がなされた。この点は今後の課題として生かすべきである。

#### (4)研究成果の集約・交流

2015年3月7日、連携研究者および海外共同研究者の出席を得て、本研究課題の最終報告会を中国・北京において実施した。席上、上記各研究者および研究代表者がそれぞれ報告を行い、日本におけるグリーフケア研究の歴史的経緯ならびに現状、中国におけるグリーフケア研究をめぐる現状認識の紹介、前項の意識調査結果の情報共有と議論、今後の研究の方向性に関する意見交換などを行った。この過程で、日中双方の研究者が持つ問題関心の所在とその社会的背景が改めて確認された。また、概念や用語の整理についても意見交換が行われ、研究組織のメンバーならびに傍聴した研究者がそれぞれの問題関心をすり合わせ、認識を深める機会となった。

この最終報告会は、本研究課題において行われた資料収集および現地調査の成果を共有する場となったのみならず、3年間の課題遂行期間を通じて、関係者全員が一堂に会し、直接議論する初めての機会でもあり、問題関心を同じくする日中の研究者の学術交流の場としても貴重な集会となった。

(5) この研究課題を完了するに際し、得られた知見を改めて総括すると、現代中国におけるグリーフケア(ソーシャルサポート・ピアサポート)の概念と実践は十分な認知を得ていないものの、潜在的なニーズはあると思われることが明らかになった。他方、グリーフケアの範疇が日本でのそのような精神面の癒し・救いに留まらないこと、すなわち死別の悲嘆と不安が個人と国家当局との緊張関係につながる場合があり、しかもそれが国家に対し補償を要求する運動に発展するという、すぐれて政治社会的な要素を持つことは、当初の予想を超えていた。この点はまさに、社会科学の領域がより本格的に取り組むべき射程である。具体的には、現代中国の様々な局面で近年顕在化している「維権(権益を守る、擁護する)」運動[呉2014]との関係を整理する必要があり、「維権」運動の一端としてのグリーフケア(ソーシャルサポート・ピアサポート)活動という視点の可能性について今後引き続き検討するべきである。

#### <引用文献>

河合千恵子(1997)「配偶者と死別した中高年者の悲嘆緩和のためのミーティングの実施とその効果の検討」『老年社会科学』第19巻第1号 pp.48-57.

李妍焱(2012)『中国の市民社会—動き出す草の根 NGO』岩波新書

日野みどり(2015)「中国・上海におけるグリーフケア自助団体の一事例—NGOの活動と機能をめぐる初歩的考察」『愛知大学国際問題研究所紀要』第145号、pp.25-44.

呉茂松(2014)『現代中国の維権運動と国家』慶應義塾大学出版会

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

日野みどり、「中国・上海におけるグリーフケア自助団体の一事例—NGOの活動と機能をめぐる初歩的考察」、『愛知大学国際問題研究所紀要』、査読有、第145号、2015、pp.25-44.

日野みどり、「為在中国建立化解喪偶悲痛(哀傷撫慰)的系統」、『大阪大学中国文化フォーラム(編)『日中台共同研究「現代中国と東アジアの新環境」—中国革命・社会変容と世界—贛州会議中国語論文選—』、査読無、2014、pp.31-46.

日野みどり、「一体化に向かう香港と中国の高等教育：香港の大学に進学した中国出身

学生の語りを通じて」、『コミュニカール』、  
査読有、第2号、2013、pp.119-139.

〔学会発表〕(計2件)

\_\_日野みどり、「1. プロジェクトの概要」、  
科学研究費助成事業「配偶者との死別後のグ  
リーフケアを日中両国で共有するための基  
礎的研究」最終報告会、2015.3.7、中国・北  
京化工大学

\_\_日野みどり、「中国・上海におけるグリー  
フケア自助団体の一事例：NGO の活動と機  
能をめぐる初歩的考察」、アジア政経学会  
2013年西日本大会、2013.11.9、大阪市立大  
学

〔図書〕(計2件)

\_\_日野みどり、「高等教育における香港と中  
国の一体化—香港の大学による中国内地学  
生の受け入れに着目して」、谷垣真理子・塩  
出浩和・容應英編、『変容する華南と華人ネ  
ットワークの現在』、2014、風響社、  
pp.259-294.

\_\_日野みどり、「現代中国高学歴群体職業観  
形成的考察—以工作經驗為着眼点」、田中  
仁・江沛・許育銘主編、『現代中国變動與東  
亜新格局(第一輯)』、北京：社会科学文献出  
版社、2012、pp.440-454.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

日野みどり (HINO, Midori)

同志社大学・グローバル・コミュニケーシ  
ョン学部・教授

研究者番号：00367632

### (2)

連携研究者

河合千恵子 (KAWAAI, Chieko)

東京都健康長寿医療センター研究所・協力研  
究員

研究者番号：00142646

### (3)海外研究協力者

陸緋雲 (LU, Feiyun)

上海財経大学人文社会学院・教授

康越 (KANG, Yue)

北京化工大学文法学院・副教授